

開催地名	愛媛県伊予市
開催日時	令和8年1月29日(木) 15:30~17:00
開催場所	伊予市役所 4階 大会議室
語り部	小川 正 (石川県輪島市)
参加者	参加人数 37名
開催経緯	地域における防災意識と災害対応能力を高めることを目的としている。 近年、自然災害が頻発しており、また、南海トラフ地震の発生も危惧されている中、行政をはじめ関係機関には迅速かつ適切な災害対応が求められている。 この講演会を通じて、一人ひとりの防災意識の向上、また本市における災害応急の対応力強化につながるものと期待をしている。
内容	<p>(1) はじめに</p> <p>令和6年1月1日の能登半島地震、そして9月の奥能登豪雨。度重なる被災に対し、全国の皆様から寄せられた温かいご支援と励ましに、心より感謝している。</p> <p>輪島市は面積の約8割が山地であり、海岸線に沿ったわずかな平地に市街地が点在する地形である。発災の瞬間、主要な道路はすべて崩落・寸断され、市内は東部・中部・西部の3地区に完全に分断された。金沢からわずか100kmの距離が、これほどまでに遠く、絶望的な距離になるとは想像しえなかった。行政機能すら麻痺しかねない極限状態のなかで、子どもたちの命をいかに守り、学びの灯を繋ぎ止めるか。私は「教育こそが復興の土台である」という信念のもと、混迷を極める現場に立ち続けた。</p> <p>(2) 被災の記録</p> <p>地震による4メートルもの大規模な隆起は、一瞬にして港を無力化し、橋梁の沈下によって道路網は壊滅した。発災後1週間、輪島市内はほぼ車が走れない状況に陥ったのである。行政職員287名のうち、初動で参集できたのは約110名。本庁に辿り着けたのはわずか40名だった。</p> <p>避難所運営も、従来の計画とはかけ離れたものだった。2,000人を想定していた計画に対し、押し寄せた避難者は13,600人。指定避難所である体育館は瞬時に限界を迎え、氷点下の寒さのなか、教室や廊下までもが人で埋め尽くされた。</p> <p>さらに9月の豪雨では、地震で傷ついた山々が一気に崩れ、河川が氾濫した。短時間での急激な増水に、ある親子は「もう外へ出られない」という絶望的な言葉を最後に消息を絶った。人間の作った「想定」がいかに脆いか。自然の猛威は、私たちの想像力を遥かに超える形で突きつけられた。</p>

### (3) 事前の備え

私たちが得た最も重い教訓は、「発災直後の行政は、わずか2割の人数でしか動けない」という現実だ。職員も一人の被災者であり、家族の命を背負っている。道路が寸断された際、無理に本庁を目指すのではなく、「最寄りの学校へ駆けつけ、その場で鍵を開け、支援を開始する」という現場の判断が、多くの命を救った。こうした「孤立」を前提とした備えが不可欠である。

- 孤立への想定

少なくとも1週間は外部支援なしで自立できる備蓄。特に学校を拠点とする場合、冬の寒さを凌ぐためのストーブ（電気不要のタイプ）や、通信が途絶した際の衛星回線の配備は必須である。

- ITとアナログの併用

1人1台端末やスマホを使い、散り散りになった子どもたちの安否を迅速に把握する仕組みを、平時から呼吸するように使いこなしておくこと。

- 誰もが動かせるマニュアル

上位者の不在を想定し、その場にいる年長者や若手職員でも運用できる、シンプルかつ実効性のある手順書の整備。


### (4) 心のケア

子どもたちの安全を最優先し、私たちは100km離れた白山市への「中学生集団避難」という決断を下した。親元を離れる子どもたち、送り出す保護者の葛藤は言葉に尽くせぬものでしたが、安全な環境での三食の提供と学びの場の確保は、復興への第一歩となった。

また、支援のあり方についても伝えたいことがある。被災した職員は、自身も家族を失い、家を壊されながらも必死に職務にあたっている。そんな彼らに「あれができていない」「これが足りない」と突きつける支援は、時に心に突き刺さるものとなること。被災地の職員に「すいません」と言わせない支援。できていないことを指摘するのではなく、「自分たちがこれを担うから、少し休んでください」という寄り添いこそが、現場を支える力になる。

### (5) 伝えたいこと

「地域から一人の犠牲者も出さない」。その核となるのは、子どもたちを「防災の主役」に育てることである。かつて私たちが勤務した中学校では、中学生が

	<p>自ら避難所運営のスタッフとなり、お年寄りに寄り添い、行政の隙間を埋める活躍を見せた。「中学生がいるから安心だ」という住民の声は、教育が地域を救うことを証明した。</p> <p>防災とは、特別な訓練だけを指すのではない。自分の命を自分で守る「自助」、隣人を思いやる「共助」、そしてこの街を愛し、より良い未来を自分たちの手で創ろうとする「志」を育てること。それこそが教育の本質である。今日学んだことを、ぜひご自身の家庭や地域で語り合ってもらいたい。子どもが「逃げよう」と言えば、大人は動く。子どもたちが誇りを持って生き抜ける街を、今度は私たちが創っていく。その確かな一歩を、共に踏み出していきたい。</p> 
開催地より	<p>大災害時には行政職員も被災者となり、参集できない職員もいることは理解していたが、能登半島地震では職員全体の2割程度しか参集できなかったという語り部の体験談を聞き、改めてマニュアルの確認と検討が必要であると痛感した。また、本市ではあまり馴染みのなかった教育行政目線からの体験談であったため、気づきの多い講義となった。本日の講義を今後の防災活動及び防災教育に活かしていきたいと思う。</p>